ひじりの家

柳田國男

青空文庫

日向路の五日はいつも良い月夜であつた。最初の晩は土々呂の海浜の松の蔭を、白い細かな砂をきしりつゝ、延岡へと車を走らせた。次の朝早天に出て見たら、薄雪ほどな霜が降つて居た。車の犬が叢を踏むと、それが煙のやうに散るのである。山の紅葉は若い櫨の木ばかりだが、新年も近いのにまだ鮮かに残つて居る。処々の橋の袂、又は藪の片端などに、榎であらうか今散りますとでも云ふやうに、忽然として青い葉をこぼし始め、見て居るうちに散つてしまふ木がある。土持殿の御支配の頃から、否々皇祖御東征よりも更に以前から、海に近い県（あがた）の里の野原では、寒い霜夜の月の明方ごとに、斯うして物の縁が土に帰して居たのであらうが、或時或旅人が通り過ぎて、之を美しいと見るのは瞬間であるなどゝ、自分は有りふれた斯んな事を考へ出した。それといふのも自分が今尋ねて行く人の境涯が、余り我々の生活と変つて居る事を、想像しながら来たからであつた。

南方の竜仙寺さんと謂つて尋ねて廻つたが、不思議と誰も知つた人には逢はぬ。そんな筈は無いのだ。内藤家の御祈願所の、随分名の有る法印さんだと聞いて見る。それならば野田の稲荷山の行者殿に違ひない。もう此辺には他に無いからと謂ふので、旭がさして来た松山の霜解けを、こつ〳〵と登つて見た。縞の着物に角帯の、髪は一寸も延ばした老人が、果して訪ねる谷山さんであつた。日向に移住して来て既に十七代に為る。本国は大和で谷山覚右衛門と云ふ人、土持家の盛りの頃に兵法の師範として、子息の重右衛門を連れて下つて来た。所領は山の麓の大貫村で、野田山に砦を構へ、稲荷は即ち其城内の鎮守であつた。世中が改まつて内藤氏の藩が出来た時、只の臣下で居る代りに山伏に為つてしまつたが、それでも火事に遭つてこの山上に移つた父の代までは、大貫の元の屋敷に引続いて居たさうである。稲荷大明神の右手には広い平地が有つて、其中央に井戸がある。之を前に取つて今の住居が、背戸を谷間に臨ませて、幽かながらも城地の俤を遺して居る。明治五年に修験の職は廃せられたが、関東諸郡の山伏のやうに、神主やたゞの農家に為らうとはせずに、作州津山の在から潰れ寺の名跡を買ひ、表向きこれを引移したのが竜仙寺で、土地の人もまだ其名を知らぬ位である。以前の名は明実院、それを法印は御自分の名にして御座る。

鎮守の稲荷様は御寺だけに、※枳尼天（だきにてん）として祀つてある。詣る人が今風だから、華曼や提灯の真赤なのも仕方が無い、自分は帰り途にその数多い鳥居の下を通りながら、是とは縁も無い津軽の海岸の荒浜を思ひ浮べた。今年初秋の風の早大いに冷かな朝であつた。一つ事ばかり考へながら、独りあの浜手の淋しい路を歩いた。曾て深浦沿革史を世に公にした海浦さんと云ふ人は、名が義観だから或は僧侶だらうとは思つたが、あんな阿倍比羅夫の直系見たやうな、昔の儘の山伏だらうとは考へて居なかつた。自分までゞもう五十一代、肉身の相続で此十一面観世音に御仕へ申すと謂つて居られた。一宗の事相は淵底を究めた篤信の聖である。日本の国風に是ほどよく適合した永い歴史の一宗派を、何で又取潰して只の真言寺に編入してしまつたかと、六尺もある大きな体を前にのし掛かつて、まるで私がさうしたかの如く、真正面から見詰められる。わしの寺は聖徳太子様の時から、俗生活の儘で成仏する教に基づいて、肉食もすれば妻子も育んで来たものだ。世中が変つたからもうよろしいと、それを大目に見て置かれる寺とは話が違ふ。世間が八釜しく無いだけで、

只の寺に女房を置くのはあれは非如法じや、破戒ぢや。わしの方は教理ぢや。手を組んで並んで行かれるわけが無いのぢやとも言はれた。貴僧を見ると昔を見るやうな気がします。定めて戦国の頃などは、此地方の勇士の家々と縁組なされ、薙刀などで大いに働いた人たちが、此御寺からも何人か出られたことであらうと謂つて見ても、にこりともせずに、此宗派の独立せねばならぬことを説く人であつた。一度逢つたら忘れ能はざる上人である。

日向の延岡の近くに谷山さんの居らるゝことは、この深浦のひじりから聞いたのである。修験派独立の初期の運動に、東京は神田の電車の交叉点の近くで、全国の行人たちが大集会を催した事があつた。其所に兜巾鈴懸の昔のまゝの姿で、期成同盟に馳せ加はつたのは、竜仙寺の法印一人であつたさうだ。自分の寺は旧藩公の時代から、此行装で寺禄を食み祈祷を仰せ付かつて来た。世間を憚かるべき道理はないと、立派に言切つて居られたと謂ふが、自分が話をして見た感じでは、海浦さんと同様小児よりも無邪気で、些しも山伏一流の高慢な様子などは無かつた。

それとは反対に寧ろ寂莫たる陰影が有つた。津軽の御寺でも二三年前に、自分等より大分若い篤学なる嫡子を亡なつた。次男は絵などを描く人である。さうして同志と為る弟子たちが少ない。自分は日向へ来てこの気の毒な話をすると、しきりに谷山さんの顔の色が曇つた。実は私の方でも相続させる積りの倅が死にました。その次は実業の方に居る為に呼戻しもならず、十五に為る孫を是から仕立てることになつたとある。其少年は今戸口に立つて、いつまでも帰る自分の後影を見て居るのがさうらしい。自分は旅人だから、勿論ずん〳〵往つてしまふ。しかもこの閑かな山の寺の人々とても、やはり亦世中の道をあるいて居て、一つ処に永くたゝずんでは居られぬのである。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆86　祈」作品社
1989（平成元）年12月25日第1刷発行
1994（平成6）年5月20日第5刷発行
底本の親本：「海南小記（三版）」角川文庫、角川書店
1967（昭和42）年3月
入力：門田裕志
校正：阿部哲也
2012年12月9日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ひじりの家

柳田國男

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/